不定期刊行　　第516号　2014.07.10

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

鍬ノ峰、大町高校山岳部の山

大町高校の西方およそ１０ｋｍに位置し、北アルプスの前衛峰として南北に長く尾を引いた双耳峰の鍬ノ峰。高さこそ北アルプスの峰々に及ぶべくもないが、大町から望むとその凛とした姿はくっきりと目立つ。

今から14年前のことだ。ちょうど大町高校創立100周年にもあたるこの年、大町高校山岳部は、創立100周年の記念事業の一つとして鶴の一声ならぬ、当時山岳部顧問だった松田大さんの一声で、この鍬ノ峰に登山道を開拓した。このことはこれまでもかわらばんで何回か紹介しているので、ご記憶の方も多いかと思う。登山道は人が歩くことによって道になる。しかし、笹に覆われた登山道は手入れをしなければ、あっという間に元の木阿弥。苦労もただの水泡に帰してしまう。一昨年、池工の生徒と鍬ノ峰に登った時、下部はずいぶん整備されていたが、しかし北峰から山頂にいたる部分は、笹がやや深くなっているのが気になっていた。松田さん転勤以後、顧問も生徒も変わったが、この登山道は、時の山岳部の関係者によって毎年地道に維持保存がなされてきたことは承知していたが、山道の維持というのは一高校山岳部の手には余る部分があるのも事実である。

そんな経緯で、本校に赴任して僕が一番気になっていたことの一つが、この鍬ノ峰の登山道の整備・維持活動のことであった。上級生や別の顧問に聞くと、一昨年はちょっとしたアクシデントで、山には入るも整備は十分にできなかった由、また昨年は下部の整備はしたものの上までは到達せず、とのことであった。今年も一度ですべてを開通させるのは無理かもしれないが、まずはとにかく一度作業に入り様子を見るとともに、一年生にこの伝統の登山道のことを伝えたいと考えた。北信越大会も終え、3年生が一応引退（夏合宿には都合のつくものは参加させるが）し、代替わりした新生山岳部の第1弾の山行として、この鍬ノ峰の整備作業を部活に組み込んで、6日に実施した。

8時には全員が登山口に集合した。参加者は1年生3名、2年生3名の全部員と僕の7人である。学校から鉈鎌を一丁、県の合庁林務課から借りたのこぎり（山作業をするということで林務課に申し込むと、先方も実績になるためか、簡単な手続きで喜んで貸してくれる）を一丁、各自がザックに括り付けて出発した。自分たちの一番身近な山、いずれ高校を卒業してからも何度も登ってほしい。そんな山の尾根道や木々を自分のものとして感じ、しっかりと目に焼き付けてほしいと願い、せっかくだからと読図トレーニングも兼ねての山行と位置付けた。快晴とは行かないが、梅雨時の天気としてはまずまずだ。およそ1時間で1208mの台地へ出る。ここでコンパスの使い方と地図の見方をレクチャーし、ここまでのポイントを少し解説した。

この先は昨年度の整備作業の重点箇所だったところである。部長のO君は昨年も作業に参加しているので、もちろん土地勘はある。「この木は去年道を塞いでいたので、俺が切った」「ここでカモシカにあったんだ」と何だか嬉しそうである。それを聞く下級生も熱心に耳を傾けている。結構高揚した気分で11:00北峰（1526m）着。ここまでは、

なんの問題もなく進むことができた。

問題はここから頂上までのおよそ１ｋｍの区間である。一人が刈り払いを始めると、およそ10m間隔で一人ずつ人が入り、自分の区間を刈り終えて前の人のスタート地点に追いつくと一番前へ出る。慣れない鉈鎌とのこぎりを使って、人一人が笹に干渉されずに通れるだけの幅を確保しながら、じりじりと前進していく。時に薮の薄いところもあるが、ほぼ背丈程度の笹に前の人が見えないこともしばしばである。作業開始からほぼ1時間後の12:00にコルに至った。そこからさらに標高で20mほど進んだ1490m地点で一本取って昼飯にした。思った以上に生徒たちがよく動いてくれる。そして仕事が丁寧だ。文句一つ言わずに黙々と笹刈りをしながらここまできた。去年は頂上まで行けなかったと聞いていたので、なんとか上まで登らせてやりたいと思ったので、腹ごしらえをしたところで、「とりあえず上まで登って、目途をつけてから下りしな、残りの笹を刈ろう」と提案して腰をあげた。ところがしばらく進んだところで、刈らなければ進めないほどの深い薮が出てきた。部長のO君が「先生、やっぱり刈っていきましょう。」という。

結局刈らずには先に進ませてはくれないのかと、さらに刈ること1時間20分ほど。生徒たちの頑張りで13:40には、頂上まで刈り終えた。頂上に出ると、北アルプスの山の多くの峰は雲の中であったが、蓮華と爺ヶ岳が恥ずかしそうに顔を覗かせていた。しかし、いずれも初めてこの峰の頂上に立った生徒たちは、自分で道を切り開きながら到達した頂上で、これらの山はもちろん、眼下の高瀬ダムや大町市を見ても歓声をあげていた。なんという充実感だろう。暫くしてから新部長のエールの下、もちろん「山岳部歌」を歌った。作業を終えた生徒たちは口々に「先輩たちはすごい。」と口にしていたが、それは自分たちがそれを受け継いだという自負の裏返しでもあろう。恐らく、彼らは来年も、率先してこの山に登ってくれることだろうと確信した。14:10に下山開始。登って来る時とは全く違う「一級国道」となった登山道をルンルン気分で下った。

追記：この登山道整備のことを元顧問の松田さんと小沼さんに連絡したところ、返事をいただいたので、ご紹介します。

ご苦労様でした。北峰からの１キロ強、刈り払いに７人工でしたか。最初のあの区間はビーバー２台を担ぎ上げ、実質４人工でした。ビーバーオペは小生と宮田先生で、運搬は生徒２名でした。以後、毎年それなりに整備し、一度ササ枯らしの除草剤も散布しました。そんなこともすべて過去の思い出です。登山道の維持には結構手が掛かります。大町高校百周年記念事業の一環で実施したものです。お守りください。（松田大）

登山道の整備、大変にお疲れさまでした。生徒に鎌を振るわせるため一層気が疲れる仕事だと察します。在任中は正直、義務的な重い仕事だったのですが、離れてみると、卒業後も懐かしい山と守りつづけた母校の登山道があることの尊さをしみじみと感じます。切り拓いた先人達の目の付け所と労苦こそ偉いと思いますが、毎年の整備にも頭が下がります。先月シャクナゲの良いころに生徒たちと林道から仏崎まで縦走しました。年に何回かそこを登る時は、歩きながら枝を払うよう心がけています。今年の冬に登った時は、ゴジラの背のロープを少し結び直させてもらいました。（小沼拓也）